

綾葉はしづかに微笑つて見せた。その微笑の表情がまともの顔にかへつてゆく  
のを見てみると、いつもとは變化のある冷たい澄んだものが、たとへば、いもり  
か何か見たときのやうな氣がしておよしは吃驚してゐた。何かに絶えず氣を取ら  
れてゐるやうに、抜けたところが、綾葉の凡てに今ははつきりと見分けることが  
できたのである。

「あのね。あの。ひよつとすると貴方にもしばらく會へないかも知れないわ。そ  
んな氣がするのよ。」

微笑ひながら言つたのをおよしは戯談のやうに聞いた。

「また詰らないことを言ふのね。だつて何處へもあなたは行くところがな  
ないの。」

「さうね。何處へもね。けれどそのうちわたしは何處かへゆくわ。」

「およしは綾葉の目をまじまじ見つめた。それは根の抜けただらりとしたやうな

光のない目のやうに思へた。

「何處へ。」

さう言つておよしは不思議なかほをした。

「何處かへ——わたしにも分らないの。」

綾葉は答へたが、自分でも何を言つてゐるか分らないやうにも思はれた。およ  
しは別人のやうな憂はしげな彼女を自分だけで話してゐるのがだんだん變になつ  
てきたのである。ひよつとするとこの人は氣がどうにかなつてゐるのではないか  
とも考へられた。

「しつかりして下さいよ。いろんな事を考へすぎるから氣が重くなつてしまふん  
ですよ。」

「さう見えて——。」

「よほど變だわ。」およしは、その時殆んど直覺的に或る忌はしい妄念におそはれ

た。そして何氣なく腰紐を見つめるとふしぎに一ヶ所だけ結び目があつて、輪になつてゐるのが、そのとぐろを巻いたなかにも鮮やかに見分けることができた。

頭の上に古釘があつた。それを目にいれると、およしは顔色を變へた。そして先刻からの一切が解つたやうな氣がして、恐ろしくなつてひとり今度ばかりだにが慄へた。と、綾葉はおよしに腰紐に目をなげたときから、これもおよしの目いろを讀みながら、巧みに目を外してゐた。

「そこを開けませうよ。閉めておくと陰氣になるから。」

およしはからりと障子をあげ放つと、そとは蒼ざらと櫻と、温かい光とで一杯であつた。明るすぎて綾葉の蒼白い皮膚がなほ生白く鮮やかになつて見えた。

土は垣根の方へ行くにしたがつてぼかぼかしてゐて、何かの芽さしがいち早く、小さい青い角を覗かせながら、日の光に優しく透いて見えた。

日光は畳の上にもまで這入つてきてゐた。あざやかに腰紐を浮ばせたが、立ちざわ

に、綾葉はそれを袂のなかへ振ぢ込んだ。およしはそれを見て變な氣がした。

「いいお天氣ね。」

「え。」

「そとをひと廻りしませうか。家にはかりゐるといけないから。」

さうおよしは誘ひをかけたが、綾葉は、その蒼白い顔を振つて、

「頭が重いから止ませう。ほんとに重いよ。明るすぎるものだから。」

柱につかまりながら、彼女はほつそりと椽側へ立ちあがつた。「ふらふらするの。」とおよしに問ひかけると。

「何んだか後方うしろへ惹かれるやうな氣がするんですの。」

さう言ひながら、綾葉はまた股のところへひやりとした毛脛のやうなものを感じた。明るい空のすつと果の方に夜が蒼黒くこもつてゐて、それが間もなく釜底のやうな暗みをもつて次第に空の方を覆ふてくるやうな氣がした。夜がくると、蒼

黒い夜がくると、異體の知れない闇が人家の屋根や庭や窓さを閉ざし初めると、ひやりとした毛脛がさわつてくると、ああ夜がくると……綾葉はさうにあたりが眞暗になつたやうな氣がしてしつかりと柱につかまつた。

「温かい明るい光線の間、蛆のやうな闇がぐつぐつ煮えくり返るやうにうごめいて見えた。」

「およしさん。」と低い鋭い、恐怖に充ちたやうな聲で綾葉が呼んだ。

「どうかなすつて——。」

そばへ寄ると、臉と唇とが鱗のやうにひりひり慄へて見えた。

「ほんとにどうかなすつたの。」

「何でもないんだが、なんだか恐くて。」

綾葉は膝がしらをがたがた慄はせながら、筋張つた瘦せた手で柱につかまつて言つた。蒼黒い闇がすつと人家の上にふうわりと覆ひかかつてくるのが見えた。

それが彼の全身の上に、ちやうど彼女の視線をもすつかり包んでしまふやうな重みを加へながら、どつしりと蔽ひかかつてくるのであつた。

「へんに目に暗いものが見えるの。あなたに見えないこと。」

綾葉は、右の手で目をこすりながら、霞んだやうなものを拂ふやうな眞似をした。煤でも飛び込んだやうで、それでゐて、遠くの人家の上の方は眞暗になつて見えた。

「氣のせいよ。ヨ程變なことばかり言ふのね。しつかりしないとイケないわ。」

およしは、そばへ寄つて彼女の手を握りながら言つた。

「でも暗いわ。日暮れ近くなつたぢやないの。」

「そんなことがあるものですか。まだ三時にもならないのよ。こんなに日が當つてゐるぢやありませんか。」

能く見ると、敷石から椽側へかけて日光が明るくあたつてゐた。綾葉はそれを

—香爐を盗む—

今まで氣づかなかつたやうに見詰めた。

「さうね。日が當つてゐるわね。」

敷石のまはりにもやはり何かの芽ざしが萌えてゐた。針のやうな青いのが、ちつくりと眼に痛くうつつた。そしてやつと氣附いたやうに、これらの日光や芽ざしを目にいらしたので、ほつと息をつくほど嬉しい氣がした。

その時屋根の上は明るく晴れて、さつきの暗いものが見えなかつた。氣のせいであることが分つた。

「ほんとにどうかしてゐたわ。」さう言ひながら、袂のなかを搜つてみて、綾葉は先刻の心持をもう一度そこで氣味わるく思ひ出したのである。何故こんなものを弄くつてゐたかといふことが判然しなかつたけれど、首すじのあたりがむづ痒い氣がした。と、振りかへると、さつきの位置に錆びついた古釘が一本、手觸り荒く打ち込まれてゐた。

大正拾年參月貳拾貳日印刷  
大正拾年參月三十一日發行

(定價金貳圓四拾錢)

版權  
所有

香爐を盗む

著者 室 生 犀 星

發行者 松 野 鶴 平

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

隆文館株式會社

電話 一七八〇番  
二二四〇番  
銀座 二二四一番

振替東京八五三番

印刷所

東京市麴町區飯田町二丁目三十三番地  
印刷者 隆文館印刷部  
三澤善哉

新しき創作集

古き毒草園

室生犀星著

忽再版

古い城下の一市都を背景にしたさまざまな男女の生活を描くに悩ましきまでに官覺に沈湎したる「古き毒草園」を初めとし外拾數篇の物語りは總て著者が繊細にして濃厚なる筆觸を凝らしたる新しき創作集なり。

恩地孝四郎氏裝幀

四六判・四百廿餘頁  
絹裝・最美本

定價金貳圓四拾錢  
送料金拾貳錢

谷崎精二氏著・永瀬義郎氏裝幀

水のほとり

創作集

忽再刊

作者はさまざまな人の生活を觀て取り、何等の雜り氣もなく如實に、その日常生活を描寫し、最後に特殊の心的過程を摘出して生な人間を明々と覘かせる。本書は「水のほとり」他拾數篇悉く作者の正直な經驗から最も尅明に人間を織込んだ獨自の傑作である。

一九二一年・二月刊行

四六判・四百餘頁  
絹裝・函入美本

定價金貳圓四拾錢  
送料金拾貳錢

岡本綺堂氏著

新刊

四六判・四百廿頁 定價金貳圓四拾錢  
絹裝・函入美本 送料金拾貳錢

▲子供役者の死

● 田中良氏裝幀 ●

著者の小説は毎に豊麗なる情緒の流れに臨み、深く義理人情の真底に徹せんとする独自の境地を描かれてゐる。特に本書は其の傷々しき哀愁に充されたる『子供役者の死』を初めとし、拾有餘篇の物語は何れも最新の創作にして爾も其の戯曲的視野に彩られたる勞作は異常の魅惑に富めるものである。

501  
245

2121

終